古市公威博士の薨去を悼む

工學博士　宮本武之輔

昭和9年1月28日，樞密顧問官從二位勳一等工學博士男爵古市公威氏が薨去せられた事は，獨りわが工學界のみならずわが國の朝野を擧げて哀悼に耐へざらしめる傷心事である。

古市博士は弱輩筆者の如きが今更紹介するまでもなく，わが工學界の先覺者であり，恩人であり，又同時に父であると同時に，わが國が生んだ國寶的偉人の一人であつて見れば，博士の履歴を茲に繰返すが如きは殆んど無益の業であるかとも思はれるが，順序として10頁を超える博士の履歴書の中から，要點だけを摘んでその郁やかしい經歴の全貌を畫いて見やう。

博士は安政元年7月12日，筑紫路藩士古市孝長氏の男として江戸蠣殼町に生れたのであるが，その81年の公生涯は次に記すが如く誠に華やかなものであつた。

明治2年1月佛蘭西學修業のため開成所に入學。

同3年10月貢進生として大學南校に入學。

同8年7月諸藝學修業のため佛國に留學を命ぜらる。

同9年7月エコール・サントラアルに入學。

同12年11月巴里理科大學に入學。翌年理學博士の學位を受く。

同13年10月歸朝。翌年內務省(土木局)及び文部省御用掛被仰付。

同17年7月內務三等技師に任ぜらる。

同19年5月任工科大學教授兼任工科大學長，兼任內務二等技師。

同21年5月工學博士の學位を授與せらる。

同　年11月內務大臣山縣有朋歐洲諸國巡回につき隨行を命ぜらる。

同23年6月任內務省土木局長，兼任工科大學教授，兼任工科大學長。

同　年9月貴族院令第1條第4項により貴族院議員に任ず。

同25年7月震災豫防調査會委員被仰付。

同26年9月補工科大學長。

同27年6月任內務省土木技監，兼任工科大學教授。

同28年1月土木會議委員被仰付。

同29年2月兼任內務省土木局長。

同31年7月任遞信次官。12月鐵道會議々員被仰付。

同32年2月工學博士會々長に當選。2月鐵道國有調査會委員被仰付。6月鐵道會議々長被仰付。

同33年5月任遞信總務長官兼遞信省官房長。6月港灣調査會委員被仰付。

同34年10月高等教育會議々員被仰付。

同36年3月帝國大學令第13條により勅命を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授く。3月任鐵道作業局長官。12月京釜鐵道株式會社總裁被仰付。

同39年4月叙勳一等授瑞寶章。6月任統監府鐵道管理局長官。9月帝國學士院規程第2條により勅旨を以て帝國學士院會員被仰付。

同43年5月臨時治水調査會委員被仰付。

同44年9月港灣調査會委員被仰付。

大正5年3月佛國レヂヨン・ドヌウル三等勳章受領。

同6年 10 月財團法人理化學研究所長を委囑す。

同7年 4 月臨時教育會議々員被仰付。6 月帝國學士院第二部長に認可。7 月臨時議院建築局顧問被仰付。

同8年 6 月度量衡及工業品規格統一調査會委員被仰付 8 月道路會議々員被仰付。12 月依勳功特授男爵。

同9年 5 月中華民國一等大綬嘉禾章受領。8 月東京地下鐵道株式會社々長となる。11 月學術研究會議々員被仰付。

大正 10 年 1 月臨時治水調査會委員被仰付。

同 11 年 7 月鐵道會議々員被仰付。

同 12 年 10 月帝都復興院評議會評議員被仰付。

同 13 年 1 月任樞密顧問官。5 月帝國鐵道協會名譽會員に推薦。

同 15 年 11 月佛國レヂヨン・ドヌウル二等勳章及び白耳義レオポルド二世一等勳章受領。

昭和2年 12 月敍正三位。

同4年 1 月授旭日大綬章。7 月米國土木學會名譽會員に推薦。

同6年 2 月英國土木學會名譽會員に推薦。

同6年 2 月宗秩寮審議官被仰付。

同7年 12 月敍從二位。

同8年 1 月土木學會名譽會員に推薦。

同9年 1 月授旭日桐花大綬章。

博士が土木學會第一回會長に推され又現に工學會々長であつた事は普く人の知る所であるが，工學博士の學位を授けられた事も，貴族院議員に勅選せられた事も，大學の名譽教授の名稱を授けられた事も，何れも皆博士がその第一回の人選にあたられた事は眞にわが工學界の先覺者であり，師父である名に負かない。

古い時代には偉大なる藝術家であつて同時に偉大なる技術家であり，政治家であり武將であつたと言ふ樣な異材が決して少くなかつた事は各國の歷史に發見する所ではあるが，工科大學教授，工科大學長，土木技監，土木局長，遞信次官，遞信省官房長，鐵道作業局（今の鐵道省の前身）長官……と言ふ樣な非常に方面の異る要職に歷任して，鄙やかしい業績を擧げられた博士の如きは誠に特筆すべき一異彩と言はなければならない。

博士の嗣子六三氏は東京大學に採鑛學科を專攻せられ筆者の兄とは同學の友人である所から，筆者は六三氏とは面識があり，又博士の三男であつた基介君は不幸にして數年前に夭逝せられたが，筆者とは中學の同窓である。さうした關係も奇緣ではあるが，筆者としては博士が港灣協會の副會長であつた關係上同協會の理事會の席上でお眼にかゝつた事がある位のもので殆んど面識の榮を得なかつたのである。

從つて博士の高潔醇厚なる人格やその日常に就て親しく追憶を語る事の出來ないのを遺憾とするが，斯うして博士の經歷の跡を辿つて見ると，今から 15 年位前から技術家の覺醒だとか技術家のための門戸開放だとかの問題が今更の如く喧しく論ぜられ始めたのに思ひ比べて無量の感慨を催すのである。

門戸開放の要望も結構ではあるが，門戸開放が行はれなければ技術家の發展が望まれないと諦めるのは，己が劍戟の鈍きを察せずして鐵鼎の固きを歎するにも等しい……と何時か筆者は「工學」あたりに書いた事がある。所詮は人の問題である。

古市博士の如きは縱横自在にその手腕を振つて行くとして可ならざるなき幾多の功業を樹てられたのである。

固よりその間には時代の相違と言ふものがある。今後古市博士の樣な偉大なる工學者は最早や生れないかも知れない。又假令生れたとしても博士の如く多種多方面に活躍する事は望めないかも知れない。それを思へば博士の逝去に對して國家のために痛惜哀悼の念ひとしほ深厚なるものがある一方に，技術界のために無限の淋しさを覺えるのである。(9—2—13)